202

# 麦之浦貝塚（むぎのうら）

（川内市陽成町字後迫）

## 位置と環境

麦之浦貝塚は，JR鹿児島本線上川内駅から川内川支流の高城川を隔てて北西側に約2.3㎞で，国道３号線沿いの岩本砕石場から右側へ約600ｍの台地上に位置し，市街地から北西側へに5.3㎞ところに所在する。

本貝塚は，高城川の支流である麦之浦川の右岸に南方へ舌状に延びた標高約13ｍ台地上に位置する。この一帯から上流にかけては，麦之浦川により開析された谷が続いている。周囲には，安山岩の山々も見られるが，ほとんどはシラスが堆積した山である。

また，貝塚の眼下には麦之浦川が流れ，背地は安山岩及び溶結凝灰岩を含む山々が連なっている。

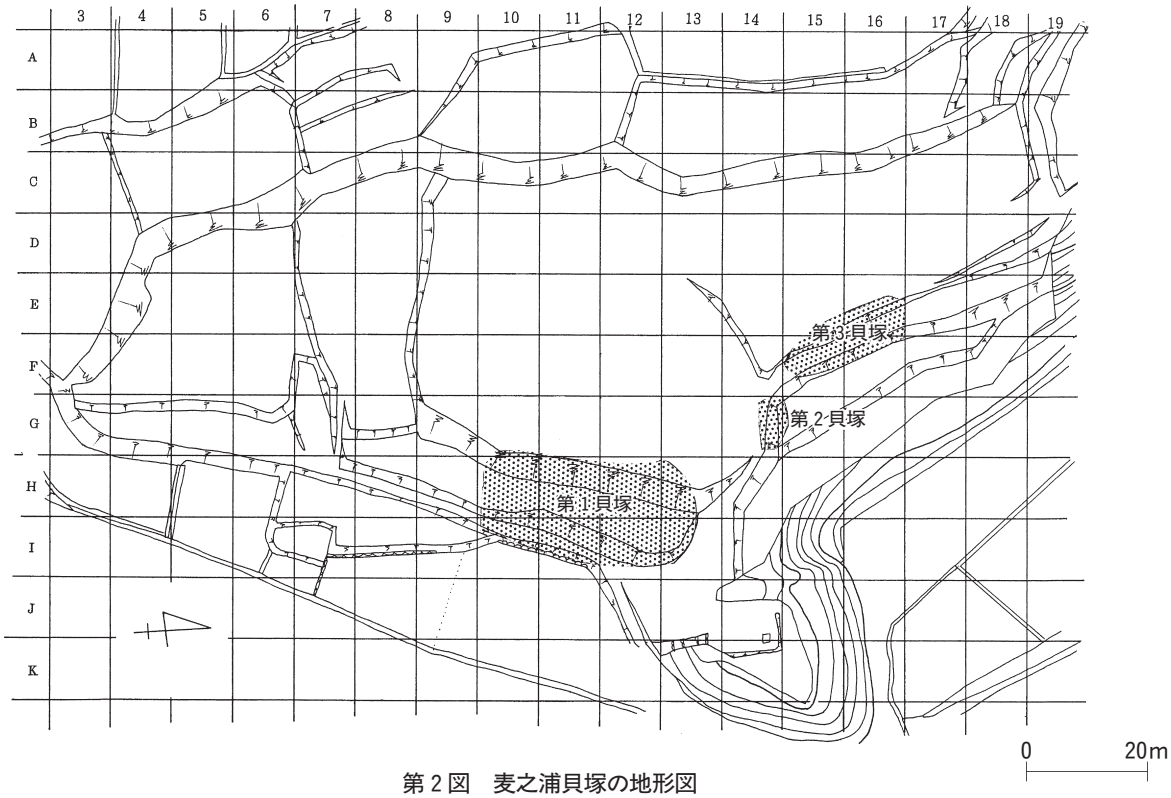
## 調査の経緯

川内市土地開発公社は，地域開発の一端として，本川用地造成事業を計画したが，造成事業予定地区が周知の遺跡であることが判明した。そこで，関係機関との協議の結果，造成工事前に発掘調査を実施することになり，県教育委員会の協力を得て，昭和58年４月から同年12月まで本調査を行った。調査面積は，4,500㎡である。

第１図　麦之浦貝塚の位置

## 遺構と遺物

麦之浦貝塚は，昭和27年に高城東中学校社会科クラブの生徒が貝殻・土器・石器・獣骨を採集した。その後，昭和37年に河口貞徳が台地上及び斜面部にトレンチ３本を設定し，確認調査を実施した。その結果，本遺跡が南九州の縄文時代後期の貝塚の様相を知る上で重要な遺跡であることが明らかになった。その後，古墳時代以降の遺物の存在も確認された。




第２図　麦之浦貝塚の地形図

また，同年秋には，池水寛治により再確認され，県下の遺跡分布地図に記載された。

地形から概観すると，シラスによって形成された舌状台地の斜面部に貝塚が確認された。また，台地上には，古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が発見された。

貝塚は，台地の東側斜面部に３か所に確認され，そのうち第２貝塚は，一部貝層が残存していただけで，土器等の混入はなかった。

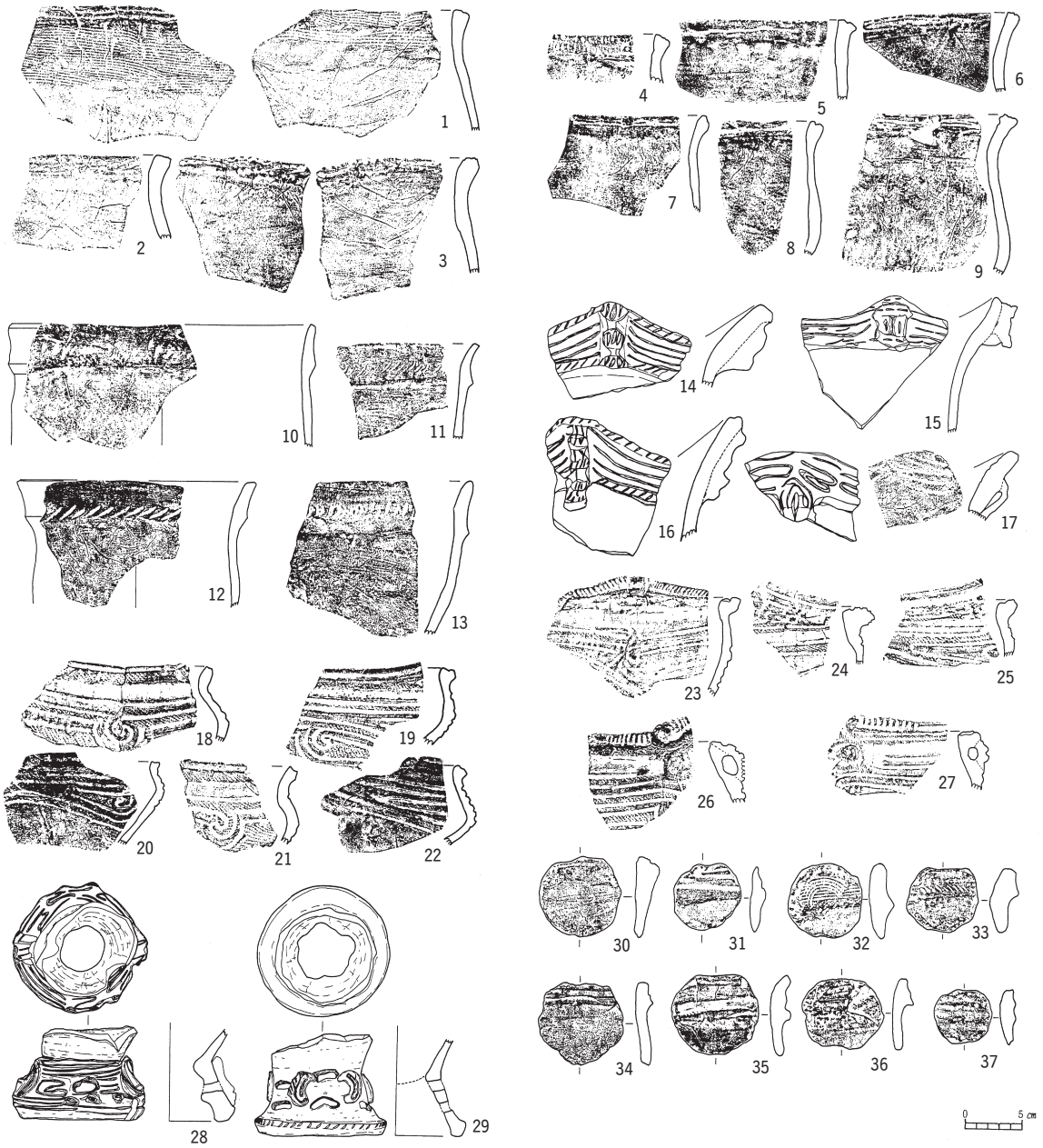
第１貝塚は，台地斜面部が浸食作用によって形成された溝内に貝塚が形成されており，貝層との混土層が複雑に堆積していた。

第３貝塚は，台地の斜面部に貝塚が形成され，第１貝塚で見られた浸食された溝内での堆積とは違い，比較的自然な堆積状況であった。（第２図）

遺物は，第１貝塚及び第３貝塚ともに貝殻を含む混土層内に遺物が集中して出土した。

土器は，市来式土器が主流を占め，そのほかに松山式土器，磨消縄文土器，無文土器などがあり，台付浅鉢形土器も見られた。

市来式土器の深鉢形土器は，器形及び文様によりいくつかのタイプのものが出土した。



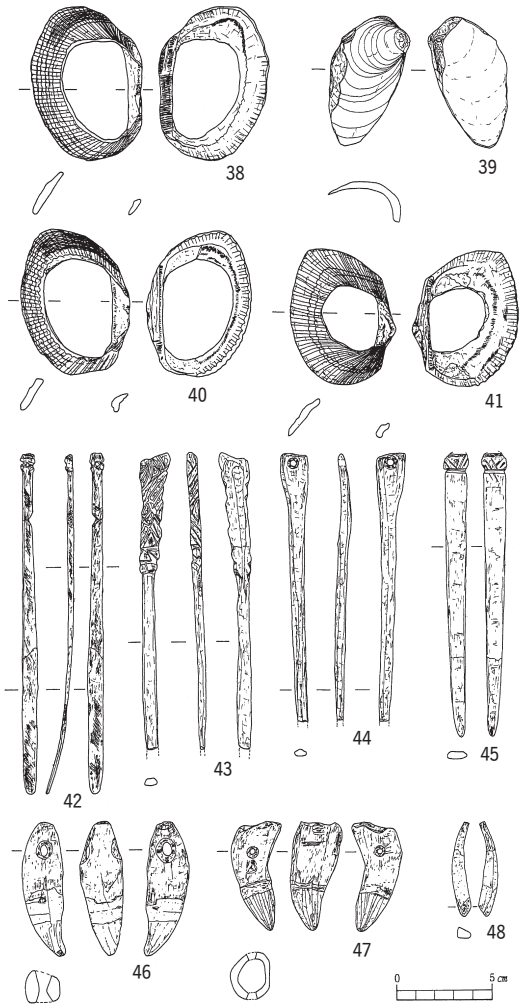

第３図　縄文土器・土製品

1～13は，口縁部が外反もしくはやや外反し，胴部から口縁部にかけやや間延びした感じで，口唇部が平坦面もしくは丸味を帯びる。文様は，この部分に施文され，刻目文・貝殻文・沈線文で構成され，器面はヘラ調整を行っている。

14～17は，口縁部が山形になり，その部分を肥厚して，「く」字状の断面をなす。器形的には，胴部がやや張る深鉢形の土器であり，山形隆起部の下に凸帯を貼り付けたものである。

文様は，肥厚した口縁部に沈線文・貝殻文・刺突文・刻み目文を組み合わして構成する。

28･29は，台付浅鉢形土器あるいは台付皿形土器と呼ばれるものである。鉢部と脚台からなり，鉢部の口縁部は水平もしくは山形となる。脚台は中空となり，透かしを持つものもある。文様は，脚台に集中し，篦状施文具により沈線文・刺突文・刻み目文




第４図　貝製品・骨角器・歯牙製品

などを施し，中には貝殻腹縁部による押圧文も見られる（第３図）。

本貝塚は市来式土器が主流を占めるが，磨消縄文を施す土器も多く出土した。

18～27は，器形的には広口の鉢形を主としており，口縁部は，外反するものと内弯するものとがある。また，口縁端部が肥厚し，胴部が強く張るものとやや張るものとがある。底部は平底をなすが，中心部にかけてやや上げ底気味の底となるものもある。口縁端部を部分的に広くし，そこに穴を開けたもの，口縁部から胴部にかけて環状把手をもつものや口縁端部に小さな山形をもつものとがある。

文様は，口縁部から胴部にかけて沈線文を平行もしくは渦巻き状に施したのち縄文をつけ，ヘラ磨きを交互におこなう磨消縄文の施文方法をとるものが大部分であるが，中には沈線文だけを配するものもある。また，口唇部には，太い沈線文を廻らし，刻み目文を施すものもある。器面は，内外面ともヘラ磨きを行っている。色調は，黒褐色ないし淡褐色を呈する。これらの中には，施文部分に朱を施すものもある（第３図）。

30～37は，土製品で，563個が出土した。そのほとんどが貝層内からの出土で，第１貝塚出土のものが半数を占める。土器の一部を円盤形に加工するもので，大半が胴部付近を加工したもので，一部には口縁部を加工したものもある。また，底部を加工したものもある。これらの中には，円盤の中央部に穴を開けたものも見られる（第３図）。

土製品は，土器を再利用したもので，市来式土器を利用しているものが，大半を占める。中には，磨消縄文土器を利用したものもある。土製品の円周加工は，打ち欠いたものが大半であるが，円周を研摩したものもある。

38～41は，貝製品で第１貝塚から多く出土している。貝製品は，貝殻の中央部を打ち欠いて環状にして，貝輪とするものと貝殻の腹縁部を打ち欠いて，スプーン状にしたものとが出土している。貝輪は，59点が出土したが，完形品は５点である。スプーン状の貝製品は，２点が出土した。貝輪にはアカガイ・トドロキガイ・ベンケイを用いており，スプー

ン状の貝製品はハマグリを加工している（第４図）。

42～48は，骨角器と歯牙製品で，本貝塚からは製品及び使用痕を有するものまで，69点が出土し，第１貝塚内からの出土が主である。

骨角器は，シカ・イノシシの骨を用いて，カンザシ・刺突具・垂れ飾り・釣り針などに加工している。また，歯牙製品には，イノシシ・イヌ・クジラ・サメの歯及び牙を用いて垂れ飾りを作っている（第４図）。

本貝塚は，縄文人骨１体が出土している。この縄文人骨は，第３貝塚地区から検出した土壙内から出土した。土壙は，長軸116cm，短軸72cm 深さ31cmを測り，ほぼ長方形の形状を呈する。また，この土壙は，隣の土壙と切り合っていたが，人骨は南頭位であった。

縄文人骨は，土壙の大きさから屈葬ではないかと思われるが，土壙が立木の根元に当たっていたために詳しい埋葬姿勢は不明である。人骨は，混貝土層中にあったため，骨質は比較的丈夫であった。寛骨及び頭蓋骨の形態から女性と推定され，頭蓋縫合，歯の咬耗などからして壮年後期の年齢に属すると思われる（第５図）。

本貝塚から出土した貝殻は，土嚢袋で3,000袋もの膨大な量であった。その内訳は，海産33種（82.5％），陸産２種（５％），淡水産５種（12.5％）であった。最も個体数の多かったものは，ヤマトシジミで，全体の約80％，次いでマガキが約６％であった。そのほかにサザエ・バイ・オキアサリ・オキシジミ・イガバカガイなどが出土している。爬虫類・両生類・甲殻類及び魚類のもので，県内の貝塚遺跡の中で最も多い出土量であった。哺乳類は，19種類が出土し，その中でイノシシ・シカが全体の約96％を占めている。そのほかにツキノワグマ・オオカミ・タヌキ・カワウソが出土している。

また，植物遺体としては，ドングリ類が出土している。

本貝塚は，縄文時代の遺構・遺物のほかに古墳時代の竪穴住居跡６軒が検出されており，遺物は，成川式土器の壺形土器・甕形土器などが出土している。

歴史時代は，掘立柱建物跡の遺構が検出され，貿易陶磁器や瓦・土師器・須恵器などのものが出土している。

**特徴**

県内で貝塚の調査例は，ほかの遺跡に比べて件数的には少ないが，多くの情報を提供してくれる。特に，当時の食文化を知る上では，貴重な遺跡で，本貝塚も同様であった。

貝殻の８割は，ヤマトシジミであったことや哺乳類の出土動物種が16種に及んだことなどが，本遺跡の特徴といえる。また，磨消縄文土器が多量に出土したことは，交流の文化を知る上で重要である。

本貝塚のある同台地は，各時代にわたり使用されていたことも地理的な条件から特徴といえる。

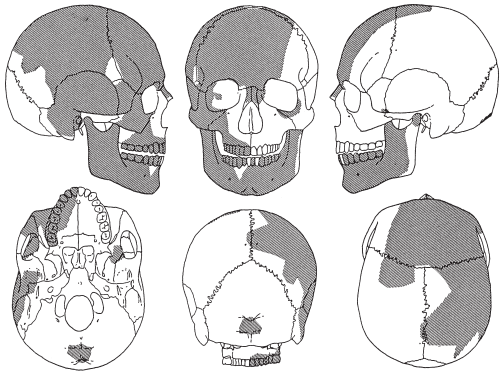
**資料の所在**

出土遺物は，川内市教育委員会に保管されている。

**参考文献**

川内市教育委員会1991『麦之浦貝塚』川内市土地開発公社

（中島哲郎）



第５図　縄文人骨